

短報 Short Report

全国闘牛サミットの開催地における意義  
—岩手県久慈市の「第12回全国闘牛サミット」を事例に

石川菜央<sup>1</sup>

The Utility and Functions of Bullfighting Summits in the Host Area:  
A Case Study on the 12th National Bullfighting Summit at Kuji City, Iwate Prefecture

Nao ISHIKAWA<sup>1</sup>

**要旨:**「全国闘牛サミット」は、闘牛の担い手や行政の担当者が各地域から集まり、闘牛の保存対策について意見を交換する協議会である。本稿の目的は、サミットの開催地における意義を解明することである。事例として、2009年に岩手県久慈市で行われた「第12回全国闘牛サミット」を挙げる。具体的には、サミットに対する行政の対応、同時開催される記念闘牛大会の観客に焦点を当てた。闘牛大会で行ったアンケート調査の結果をもとに、観客の闘牛との関わりを検討した。その結果、サミットの意義として行政が普段よりも積極的に闘牛の運営を支援すること、住民の闘牛に関する関心が大きくなることを指摘できた。

**キーワード:** 地理学, 文化, 伝統行事, 闘牛, 観客

**Abstract:** The “National Bullfighting Summit” has been set up with the view to discuss how bullfighting, a traditional Japanese event, may be reinstated as a popular activity. The aim of this paper is to study the significance of such a summit to the area that hosts it. I carried out a study on the 12<sup>th</sup> National Bullfighting Summit at Kuji city, Iwate Prefecture. This paper, in particular, focuses on the measure of support extended by the city office and individual spectators of a ceremonial bullfighting game that was jointly hosted by the city. I studied the extent of the involvement of the audience in the bullfighting from a questionnaire survey conducted at the game. As a result, I was able to point out the utility and functions of bullfighting summits in the host area. First, city offices were likely to be more positive and committed to the bullfighting than usual as a result of these summits. Second, these summits were responsible for drawing a number of new spectators to the bullfighting game.

**Keywords:** geography, culture, traditional event, bullfighting, spectator

I. はじめに

本稿の目的は、サミットの開催地における意義を解明することである。事例として、2009年に岩手県久慈市で行われた「第12回全国闘牛サミット」を挙げる。

日本の闘牛は、岩手県久慈市、新潟県中越地方、島根県隠岐、愛媛県南予地域、鹿児島県徳之島、沖縄県（本島、石垣島、与那国島）の6か所で行われている伝統行事である。闘牛は、各地域の産業や文化を背景として、独自の発展を遂げてきた。闘牛を通じた全国的な交流が活発になったのは、交通手段や情報網の発達した1970年代ころからである。1990年代からは、携帯電話やインターネットの普及により、牛の売

買や闘牛に関する情報交換などがさらに盛んになっている。個人単位での交流に加え、全国闘牛サミットや全国闘牛大会など大型のイベントも行われている。

著者は、「農閑期の娯楽として始まった闘牛が、農業で牛を飼う必要のない現代になっても、担い手が専用のウシを飼うことで続けられているのはなぜか？」という問題意識を持つ。これまで南予（石川、2004）や隠岐（石川、2005）、徳之島（石川、2008）を対象として、ウシの持ち主であり飼育者でもある牛主、闘いでウシをけしかける勢子、彼らの家族や近隣居住者など、担い手の活動に着目し、闘牛の存続要因を論じてきた。その中で、闘牛の存続要因が、地域内だけに

あるのではなく、地域同士の結びつきにもあることが分かってきた。桑原ほか（2007）も、闘牛を通じた交流の全国化について、さらに詳細な検討が必要だと指摘する。そこで、本稿では闘牛を通じた担い手同士の全国的な交流として全国闘牛サミットに着目する。著者は、サミットには2つの役割があると考え。1つは、闘牛の中心的な担い手たちが全国から集まり、情報交換をすることである。もう1つは、闘牛大会を大型のイベントとして開催することで、開催地における住民の闘牛に対する関心を高くすることである。

本稿では、後者に着目し開催地の側から見たサミットの意義を検討する。そして、行政の対応や、観客の反応をもとに、開催地の人々がこうしたイベントをいかに受け入れているのかを検討する。特に、闘牛大会で観戦する観客に焦点を当てた。著者は、愛媛県教育委員会文化財保護課（2001）や、二十村郷牛の角突きの習俗保存会（1982）など、闘牛にまつわる習俗の記録が中心であった従来の研究に対し、担い手の活動に焦点を当てることで、闘牛の存続要因をより明確にすることを試みてきた。一方で、大会の観客が闘牛とどのような関わりがあるのか、また何をきっかけにどこから来ているのかといったデータにもとづく考察は課題となっていた。そこで本稿では、久慈市におけるサミット記念大会に来場した観客に対し、闘牛との関わりを問うアンケート調査を行った。アンケートは、闘牛場の観客席を歩いて、観客1人1人に手渡しで依頼し、その場で回収した。261人から回答を得た。

本稿では「闘牛」という語句の混同を避けるために、牛同士を闘わせる行為を「闘牛」、一般の「牛」に対して闘牛用の牛を「ウシ」、闘牛大会を「大会」と表記する。

## II. 岩手県久慈市における闘牛サミット

久慈市は、岩手県北東部の沿岸にあり、人口は約3万8千人である。江戸時代から南部牛といわれる赤茶色の和牛の産地であった。南部牛は、南部地方で生産された塩や鉄を背負い、北上山脈を越えて運んだ。旅の前に先頭に立つ牛を決めるために牛を闘わせたのが、この地域における闘牛の始まりといわれる。戦後は途絶えていたが、1980年代に山形村で大会が復活した。2006年に山形村と久慈市が合併したため、闘牛開催地に該当する行政区域は久慈市となった。現在、久慈市は南部牛を改良した和牛、「日本短角種」をブランド和牛として全国に売り出している。日本短角種は、闘牛にも用いられており、全国の闘牛開催地に売られている。特に、新潟県中越地方では、江戸時代から荷役を終えて売り払われた南部牛を用いて闘牛を行っていたといわれ、現在も、久慈市から多くのウシを購入している。

全国闘牛サミットは、1998年に島根県隠岐郡西郷町の提唱で始まった。1年に1度、全国の闘牛開催地の担い手と行政担当者が集まり、闘牛の保存対策について意見を交換する協議会である（表1）。各地域が持ちまわりで主催し、サミットに付随して記念闘牛大会を行う。2009年は、久慈市が主催者となった。闘牛場のある旧山形村の代表的イベントである「つつじ祭り」と合わせ、6月中旬に開催された。6月13日にサミットの幹事会と牛主による歓迎会、14日に記念闘牛大会、サミット協議会と交流会、15日に久慈市内の観光視察が行われた。

サミットの特徴として、普段は担い手たちが中心になって大会を運営するのに対し、会議の進行や大会の運営に、行政が積極的に関わる点が挙げられる。その

表1 闘牛サミットおよび全国大会の開催状況

回	場所	開催年月	協議内容や話題になった点
1	都万村：隠岐	1998年9月	闘牛ネットワークで交流と情報交換を広げる。5県7町村の参加。
2	西郷町：隠岐	1999年8月	他町村にも幅広く参加を呼びかける。
3	愛媛県宇和島市	2000年11月	開催地が持ち回りでサミットと大会を開催することが決定。
4	新潟県小千谷市	2001年	
5	徳之島町：徳之島	2002年10月	12市町村から46人+韓国から6人。学校教育での闘牛の取り扱いや観光PRについて情報交換。
6	沖縄県具志川市	2003年11月	「闘牛どころ具志川市」をアピールするために、市内から選抜された牛だけが出場。1)
7	岩手県山形村	2004年6月	サミットの開催に向けて野外闘牛場が整備された。
8	伊仙町：徳之島	2005年5月	山古志村から震災で徳之島に引き取られたウシが出場。
9	新潟県長岡市	2006年9月	震災からの復興を目指す旧山古志村にて開催。
10	沖縄県うるま市	2007年5月	うるま市石川多目的ドームのオープン記念大会と共催。
11	天城町：徳之島	2008年5月	全島大会との共催で開催。

資料：琉球新報（2000年7月3日）より

傾向は、市民へのPRや組織作りなど、サミット開催の数ヶ月前から強く現れていた。まず、2009年1月の久慈市の広報では、「今年は丑年 牛興し」のタイトルで巻頭特集が組まれた。ここでは、市長を座長として、闘牛の運営組織の会長や畜産、観光の代表者が集まり、牛による地域興しに関する座談会の様子が報道された。市長は冒頭で、畜産が重要な産業である久慈市を全国にPRするために、同市で初めて行われる闘牛サミットに高い期待をしていることを述べた。サミットへの準備機関として、発足した「全国闘牛サミット in 久慈大会実行委員会」は、久慈市の呼びかけで、市の農協、商工会議所、観光協会、平庭観光株式会社の4団体で構成され、事務局を久慈市が引き受けた。サミットの運営を市が全面的にバックアップしていたことが分かる。

著者の久慈市長に対する聞き取りでは、「牛は食べてよし、闘ってよし、人にやる気を起こさせてよし」と、肉牛・闘牛としての日本短角種の生産を盛り上げて、地域の人々を元気にしたいと述べた。市長は、歓迎会や記念大会にも出席し、サミットでは進行役を務めるなど中心となって指揮を執った。久慈市は、闘牛の運営組織である「いわて平庭高原闘牛会」に対し、ウシの飼育や大会の運営費を支援するために、1年に50万円の補助金を支給している。今回のサミットに対しては、市が110万円を支出したほか、観光協会や商工会議所からなる実行委員会や企業もスポンサーとなり、合計で178万円の補助金が当てられた(表2)。また、サミットや大会には準備段階から多くの市役所職員が関わり、大会当日も、チケット販売や交通整備、会場整理などのために、久慈市役所の職員約50名が働いた。

久慈市がサミットを闘牛の関係者の交流だけではな

表2 大会に関する支出入(単位:円)

【予算の確保】	
久慈市	110万
闘牛サミット実行委員会(2万×4団体)	8万
企業からの協賛	50万
闘牛サミット協議会	10万
合計	178万
【支出の内訳】	
ゲスト牛へ謝金(10万×5頭)	50万
芸能アトラクション	20万
ポスター、パンフ、チケット作成	40万
広告	30万
闘牛会への特別補助金	30万
合計	170万

注:闘牛サミット実行委員会は、久慈市の農協、商工会議所、観光協会、平庭観光株式会社の4団体から成る。

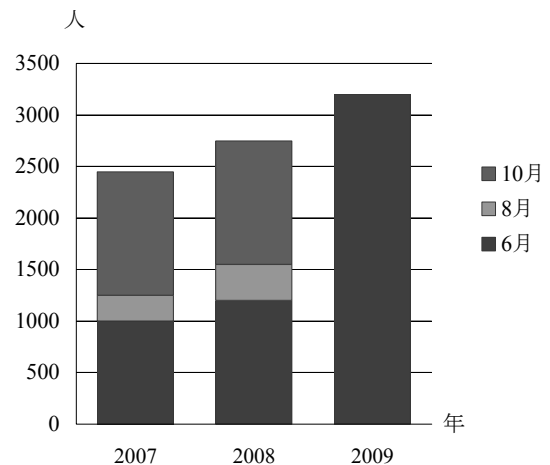


図1 久慈市における大会への入場客数  
資料:アンケート調査

く、地域を盛り立てるイベントとして捉え、行政ぐるみで取り組んだことが読み取れる。

### Ⅲ. 住民と闘牛との関わり

久慈市が行政ぐるみで取り組んだ闘牛サミットは、記念大会での観客動員数から見て大きな成果を挙げた。サミット大会のみで2007年、2008年の年間の合計観客数を大きく上回る、3,200人の観客が集まった。

サミット大会の観客は、普段は闘牛とどのような関わりがあり、大会に足を運ぶことでどのような影響を受けたのだろうか。会場で行ったアンケート調査をもとに、今回のサミットが開催地域に果たした役割について検討する。

回答者の年齢は50代、60代、70代が最も多かった(図2)。性別は、男性が101人に対して女性が83人であった(図3)。牛主や勢子は男性が多く、男性の世界と見られがちな闘牛にて、数多くの女性客の回答を得ることができた。居住地は、岩手県が261人中202人と多く、次が青森県の43人である(図4)。

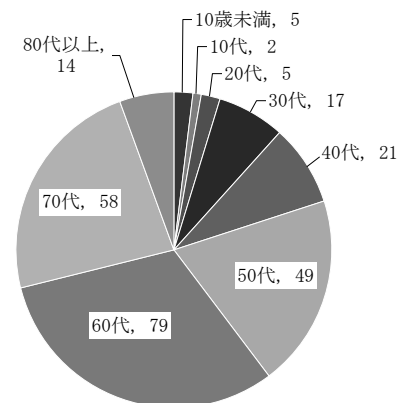


図2 回答者の年齢  
資料:アンケート調査

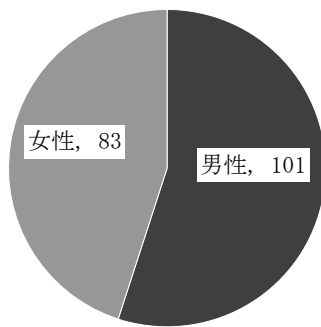


図3 回答者の男女比  
資料：アンケート調査

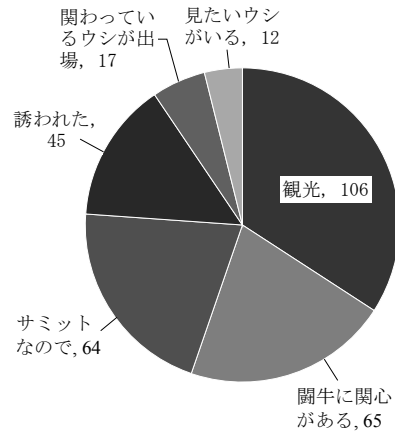


図6 大会に来たきっかけ  
資料：アンケート調査

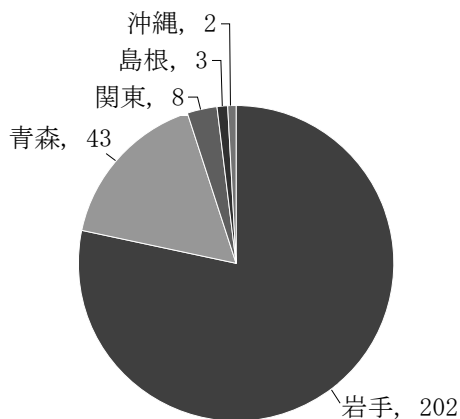


図4 回答者の居住地  
資料：アンケート調査

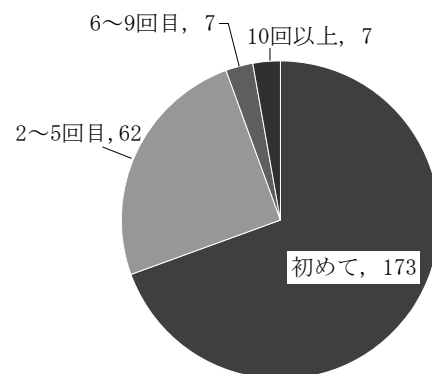


図7 来たのは何回目か  
資料：アンケート調査

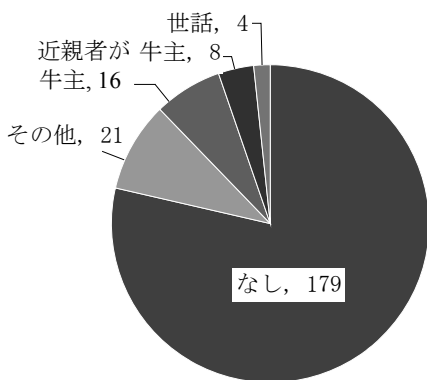


図5 回答者の闘牛との関わり  
資料：アンケート調査

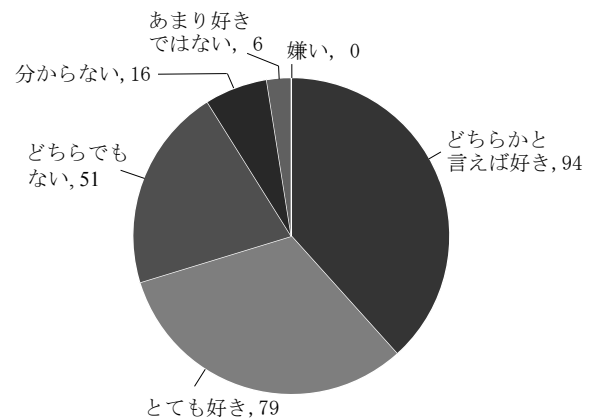


図8 闘牛は好きか  
資料：アンケート調査

遠方である関東から来たという人が8人いた。

まず、闘牛との関わりについての問いには、「牛主である（ウシを飼っている）」、や「家族や友人が牛主である」と答えた人よりも、「特に個人的な関わりはない」と答えた人が最も多く（図5）、228人中179人であった。また、来たのが何回目か、という質問には、2回目以上と答えた人が249人中76人だったのに対し、249人中173人が初めて来たと答えた（図7）。サミット大会に闘牛の関係者だけではなく、ふだんは

関わっていない多くの人が観客として訪れたことが分かる。闘牛に来たきっかけとしては、「観光のため」が309人中106人、「闘牛に関心があるので」が65人、「サミットなので」が64人であった（図6）。「新聞を見て」青森県の八戸市から来たという人もおり、サミットを成功させるために大々的に宣伝をしたため、初めて来た観客が多くなったと考えられる。

闘牛を好きかどうか、という問いには（図8）、246人中94人が「どちらかと言えば好き」、79人が「と

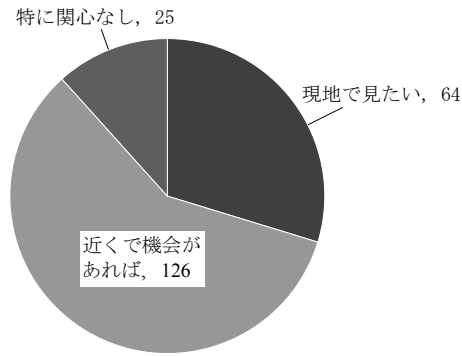


図9 他地域の闘牛も見たいか  
資料：アンケート調査

でも好き」と答えており、二つを合わせて約3分の2の人が闘牛に好感を持つという結果になった。また、「とても好き」と答えた人のうち40人は初めて闘牛を見ており、今後のリピーターになる可能性もある。

他地域の闘牛も見たいか、との問いには、215人中126人が「近くで機会があれば見たい」、64人が「現地へ行って見たい」と答えた(図9)。記念大会で配布されるパンフレットに、全国で開催地が記されていることに加え、大会の最中にも他地域の闘牛のルールなどの紹介がアナウンスされた。他の開催地に対する理解や関心を深めるというサミットのねらいが、観客に対して成功していると言える。また、地域の闘牛をわざわざ現地まで行って見たいと答えた人が64人いることは、今後、闘牛を通じた交流の全国化が観客の側からも進む可能性を示す。

図10は、回答者の市町村別居住地と、初めて来た人の割合を組み合わせて示したものである。久慈市から遠い地域ほど、初めて来た人の割合が高い傾向にある。ふだんの大会では来ないような遠い地域の人々がサミットをきっかけに闘牛を見に来ていると考えて良いだろう。サミットの効果として、県内や隣接県を中心に闘牛に関心を持つ人を新たに増やすという点を指摘できる。

観客の感想を示した(表2)。岩手県から来た30代の主婦は、「夫に誘われてあまり乗り気ではなく見に来たが、闘いもすばらしく、楽しく見られて良い経験だった」と記す。このほかにも、初めて見た闘牛への感動を記した意見が多くあった。また、いつも行っている実況中継に加え、新潟県中越地方からゲストで来た牛主による解説が好評だった。岩手県から以前にも大会に来たことのある40代の男性会社員は「中継のコメントがよい。もっとほしい。勢子のおもしろさ、技を初めて知った」と述べる。また、中越地方などへ売る予定のウシを闘わせているため、ウシを傷つ

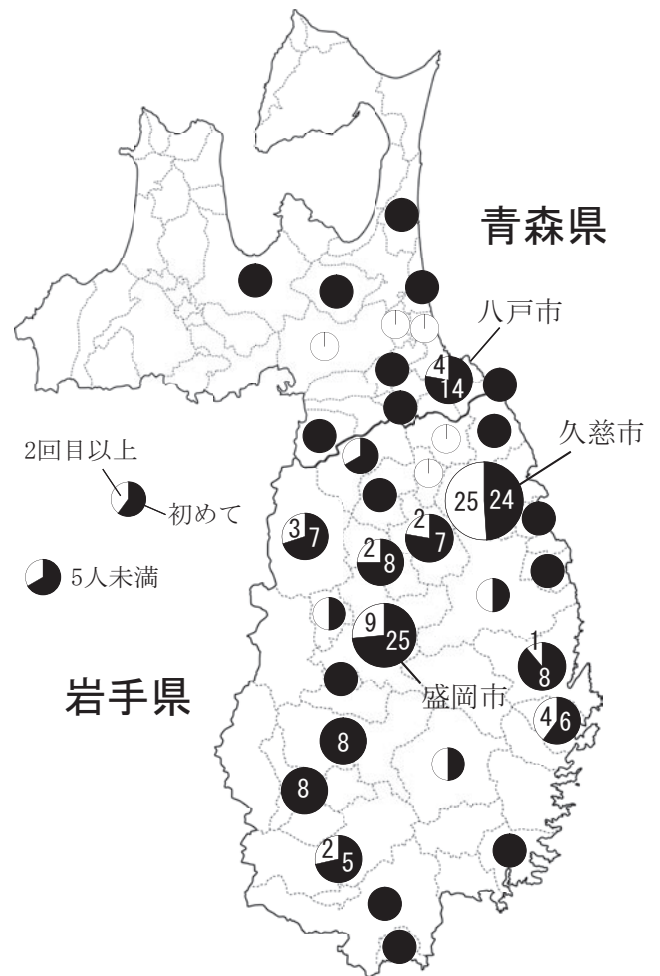


図10 久慈市サミット大会における観客の居住地  
注：数字は人数を示す  
資料：アンケート調査

けないように全ての勝負を引き分けにする点については、意見が分かれた。引き分けに好感を持つ意見としては「引き分けは良いと思う。ウシも人もけがをしないために」(40代主婦、岩手県)、「引き分けとすると云うのも優しさがあって、安心して見ることができた」(70代主婦、岩手県)などがある。反対に、「勝負をはっきりさせてほしい」(30代酪農男性、青森県)など、勝負を付けないことへの不満を書いた感想もあった。また、他地域の激しい闘牛のイメージを持って大会へ来た人の中には、「全国闘牛サミットで楽しみにして来たが、去年の大会と内容は同じだったからちょっと残念。激しくなると思っていた」(30代男性、岩手県)、「何か物足りなかった。以前にテレビで見た他地域の闘牛のイメージでは、もっと迫力があった」(50代女性、岩手県)といった意見もあった。

新潟県中越地方の闘牛は、久慈市と同じように勝負を付けない。それは人々が、両方のウシ、両方の牛主に花を持たせる形を好むからである。また、牛主によれば、勝負は白か黒かの2通りしかないが、引き分け

表3 観客の感想

年	性	県	市町村	職業	感想
30	M	A	五戸町	酪農	闘牛大会を岩手だけでじゃなくやってほしい。
30	F	A	六ヶ所村		取り組みしながらの解説がありとても楽しく見る事ができた。鼻のひもを取ると迫力があり見ている方も興奮する。
30	M	A	五戸町	酪農	最初に牛を回して近くでみせてほしい。勝負をはっきりさせてほしい。
30	F	I	山田町	主婦	今回初めて闘牛自体を見た。夫に誘われてあまり乗り気ではなく見に来たが、闘いもすばらしく、楽しくみれて良い経験だった。夫の実家でも昔、牛をかっていたそうで、以前から行ってみたい大会にこれにて感激した。
30	M	I	山田町		全国闘牛サミットで楽しみにしてきだが、去年の大会と戦い内容は同じだったからちょっと残念。はげしくなると思っていた。
40		I	滝沢村	会社員	勢子のおもしろさ。わざをはじめて知った。中継のコメントがよい。もっとほしい。
50	F	I	葛巻町		隣町から、公民館高齢者教室で見学に来た。迫力があり、実際の戦のおもしろさを感じた。隣町で近くなので、観光でまた見に来ても良いと思った。全国大会という記念の年に見ることができ良かった。
50		I	盛岡市	主婦	いつかはみてみたいと思っていた。引き分けは良いと思う。牛も人もけがをしないために。
50	F	I	奥州市	会社員	主催者の挨拶が長い。お花の御礼が多すぎる。
50	F	I	釜石市	パート	娘の嫁入り先は鹿児島県天城町で牛を飼っている。また来たい。
50	M	I	北上市		全くの期待外れであった。残念！
50	F	I	久慈市	主婦	初めてだったので良かった。
50	F	I	滝沢村		楽しかったけど、何か物足りなかった！以前にテレビで見た他の地域の闘牛のイメージでは、もっと迫力があつた。
50	F	I	盛岡市	パート	牛の年齢や体の大きさのちがいがよくわかった。相手の様子を見ながら闘う間の持ち方など見ていてとてもおもしろい。まわりの勢子と牛の間合い、声がけなど、初めて見聞きする事が多く楽しい。牛のぶつかり合い、ハラハラドキドキだった。
50	F	T	日野市	主婦	スペイン・ポルトガル系の闘牛は好きではないので、世界の人に日本の闘牛をもっと知ってもらいたい。闘牛と牛を世話する人たちの家族的な付き合い等、日本の闘牛文化をつないできた良い面をもっと皆に教えて欲しいと思った。取り組みに集中したいので、「お花」の御礼はマイクでいちいち流さないで、掲示板かなにかを利用してほしい。
60	M	A	八戸市	無職	新聞（デーリー東北八戸）を見て来た。大変良かった。
60	M	I	盛岡市	無職	迫力がありおもしろい。
60		I	遠野市	農業	激しいぶつかり合いを期待したい。
60	M	I	久慈市		テレビで見たことがある（沖縄）。テレビで見て迫力があって一度見てみたいと思い、電話をかけたら役場の人が教えてくれた。ほそこの道をつくってほしい。
60	F	I	葛巻町	主婦	隣の町に住みながらも初めての闘牛だった。もっと激しいものかと思ったが意外とおとなしく…。塩の道の関係で牛の事は少しは分かっているつもりだったが。江刈、葛巻中方の出どころも中方節にもあるように、闘牛は初めてだったので、全国的に闘牛があるという事も、私達高齢者大学生としては良い体験だった。ちなみに葛巻町は人口より牛が多い町である。
60	F	I	滝沢村		知人に写真を見せてもらってから絵の題材にしている。体の筋力の付き方を見に来てる。水墨画で闘牛の絵だけを5、6年描き続けている。闘牛場に毎年来ている。
60	F	I	宮古市	無職	初めて見るためもっと残酷かと思っていたが、見て安心した。牛もいろいろ性格があると思った。
60		I	盛岡市		近場で行きやすい場所では何か所かで大相撲の様に場所を設けてはどうか。
60	F	I	矢巾町		闘う牛がなくならない大会をつづけてほしい。
70	M	I	盛岡市	無職	俳句のために来た。いつの頃からか闘牛が行われていたかはよく分からないが、これも一つの文化だと思う。大会を開催し、終了までに人間を含めて歴史の伝承が織り込まれているように思う。是非つづけて、研究対象として続けて欲しいし、その結果を知りたいものである。
70		I	久慈市	農業	牛を廻り引いて紹介したらいいと思った。
70	F	I	宮古市	主婦	募集に興味一杯で申し込んだ。迫力があり楽しんだ。引き分けとすると云うのもやさしさがあり、安心してることができた。
70	F	I	盛岡市	自営業	闘牛を初めて見た。デビュー戦に出た若い牛は将来良い闘牛になると解説者が話したが、健闘を祈る。この様なイベントがこの場所である事を初めて知った。帰ってから話題が一つ増えた。
70	M	I	矢巾町	無職	大変な迫力でびっくりした。牛がかわいそうな気もした。

資料：アンケート調査

にすることでウシの闘いぶりそのものを奥深く楽しむことができるという。もともと久慈市の闘牛は「あらかじめ闘わせて強いウシを売ってほしい」という中越地方の牛主の要請により復活したものである。そのため、大会のルールも中越地方とほぼ同じ形式を取っている。中越地方では観客の間にも引き分けを楽しむ習慣が定着しているが、久慈市では、それを物足りないと感じ、率直に表現する観客もいる。今後、中越型の闘牛を観客が楽しむようになるのか、激しいイメージの闘牛を求めて、他地域の大会を見に出かける観客が出てくるのかは興味深い。

サミットの開催は、地元のマスコミでも大きく取り上げられた。青森県東部と岩手県北部を購読エリアに持つデーリー東北新聞では、「久慈で闘牛サミット、3千人が激突観戦」(2009/06/15)として、サミットと記念闘牛大会の様子を報じた。こうした記事を見て、新たに闘牛に関心を持つ地元の住民が増える可能性は高い。

#### IV. おわりに

本稿では、久慈市における事例を対象として、全国闘牛サミットの開催地における意義を検討した。1つ目の意義は、サミットの開催を通して行政が普段よりも積極的に運営に携わる点である。闘牛の運営組織に対する補助金が増え、大会に向けてのウシの育成や会場整備などが進んだ。人的支援では、市の職員が実際に大会の主催者として関わった。広報を大々的に行うことによって、久慈市以外に住む多くの人々が初めて大会に足を運んだことも大きい。

2つ目の意義は、サミットをきっかけに、闘牛に関心を持つ住民が増えたことである。初めて闘牛を見て、また来たいと感じた観客が多くいたことは、大きな成果と言える。全国の闘牛開催地に共通する課題として、担い手の高齢化や後継者不足がある。しかし新たな担い手が生まれるきっかけは、担い手の家族や近

所に住む人同士の関係に限られている。闘牛の担い手の知り合いでない人物が、大会に足を運んだり、闘牛と関わってみたいと感じたりする機会は少ないのが現状である。その中で、日常生活で闘牛と関わりのない人が、大会に足を運び闘牛に好感を持つことは、今後、新しい担い手が生まれるきっかけにもなりうる。引き分けを前提とする勝負のあり方には、賛否両論があった。しかし、それも含めて地元や他地域の闘牛について、考える機会を持つ人が増えることは、今後の闘牛の発展に有意義である。

闘牛サミットは、牛主同士の交流を図って立ち上げられた。本稿では、それに加えてこれまでに闘牛と全く関わりのなかった、開催地の住民が闘牛を初めて見たり、闘牛について考えたりする機会を与えるというもう1つの役割を指摘することができた。今後は、こうした闘牛に関する全国的なイベントでの調査を続け、開催地による地域差なども検討したい。

#### 【文献】

- 石川菜央 (2004) : 宇和島地方における闘牛の存続要因—伝統行事の担い手に注目して—。地理学評論, 77, 957-976.
- 石川菜央 (2005) : 隠岐における闘牛の担い手と社会関係。人文地理, 57, 374-395.
- 石川菜央 (2008) : 徳之島における闘牛の存続と意義。地理学評論, 81, 638-659.
- 愛媛県教育委員会文化財保護課 (2001) : 『南予地方の牛の突きあい習俗調査報告書』愛媛県教育委員会。
- 桑原孝雄・西村明・尾崎孝宏 (2007) : 「周辺=周辺ネットワーク」の形成と特質について—闘牛ネットワークの事例より。人文学科論集, 65, 25-48.
- 二十村郷牛の角突きの習俗保存会 (1982) : 『二十村郷牛の角突きの習俗』二十村郷牛の角突きの習俗保存会。  
(2009年8月31日受付)  
(2009年10月26日受理)